

3. 当科における喫煙妊婦に 実態と周産期医療に及ぼ す影響について

産婦人科学

保倉 宏, 渡辺 博, 池田綾子, 岡崎友紀,
庄田亜紀子, 岡崎隆行, 多田和美, 西川正能,
田所 望, 稲葉憲之

【目的】当周産期センターにおける, 妊婦の喫煙が及ぼす影響について検討する。

【対象・方法】2001年1月から2003年12月の3年間で, 妊娠22周以降に出産した単胎妊娠2,217名を対象とした。喫煙妊婦をS群, 妊娠中に喫煙した妊婦をO群, 夫のみ喫煙している妊婦をH群, 夫婦とも非喫煙のN群に分け, ①来院状況別各群妊婦の頻度②母体の転帰・合併症③児の転帰④母体搬送後のNICU入院頻度⑤出生体重について比較検討した。

【結果】当院へ母体搬送された妊婦のうち, 喫煙妊婦からの出生児はNICU入院頻度が有意に高かった。喫煙妊婦では早産・低出生体重児・帝王切開率の頻度が高まるが, 出産までに禁煙した妊婦では非喫煙妊婦との転帰の差はみられなかった。

【考察】妊婦の喫煙は母児に対する明らかなリスクファクターであり, 喫煙妊婦には積極的に禁煙を勧めるべきである。

4. 最近十年間および20～ 30年前における皮膚悪 性腫瘍の統計的検討

皮膚科

鶴見純也, 大塚 勤

【目的】皮膚悪性腫瘍の増加を統計学的に検討する。

【対象・方法】1975年1月から1984年12月までの10年間182人, および1992年1月から2001年12月までの10年間1183人における皮膚悪性腫瘍患者を対象とし, 発生部位, 年齢, 性別から統計的検討を行った。

【結果】全ての腫瘍総数が増加しており, 中でも皮膚付属器腫瘍の増加が著しかった。付属器腫瘍の中では近年日光露出部を発生母体とするものが増加しており, 日光暴露に関して有棘細胞癌よりも密接に関与していることが考えられた。この結果から今後, さらなる皮膚付属器腫瘍の増加が予想される。